

戦後75周年を迎えるに当たって反戦の誓い。

終戦から、75年目を迎えました。そうして、戦後生まれ、所謂、戦争を知らない方々が、日本人の85%に近い人口を占めるそうです。あの悲惨な日中事変や、太平洋戦争を子供として体験したことを後世に残すのが、我々、体験者の務めだと思います。

9月2日のNHK ラジオ深夜便（午前4時）「明日へのことば」を偶然、耳にしました。内容は、「葛根廟（かっこんびょう）事件に就いて」。話す方は、「興安街命日会」会長の大島万吉氏（84才）。これは、逃避行中の日本人大虐殺事件に就いてでした。私は、この事件に就いて何の知識もありませんでした。葛根廟と言うのは、ラマ教のお寺で、ここは、モンゴル人と日本人との交流の場だったそうです。

その付近は、モンゴル人が多く住む土地でしたが、満州国関連の興安総省が設けられ、その首都は興安街と呼ばれました。当然、関東軍関連の役所、軍人も多くいた場所です。そこに、昭和20年8月14日（日本降伏の1日前）に旧ソ連軍の侵攻があり、興安街から、着の身着のまま、避難しようとした、約1,200名の日本人が虐殺された事件だったと知りました。

当時、日本の満蒙開拓政策に基き、約50万の日本人が新天地開拓を夢見て渡満したとされます。

私らの理解では、日本陸軍の精鋭たる関東軍がこれら無垢の自国民を保護し車両、鉄道や馬車を提供して南下を手助けするのが当然の義務と思われます。所が、大島氏は、関東軍の役割をこう説明されました。関東軍は、国民を守れない、守るのは、国の組織、国の行政機構だけと聞かされたそうです。

約一年後、日本の地にたどり着いたのは、僅か約110名。

この日本陸軍の横暴振りは、司馬遼太郎氏の記述を思い起させました。北関東方面の戦車隊に所属していた同氏は、米軍の九十九里浜方面への上陸に備えて、南下する際、当然、都心とか千葉方面からの一般避難民と道路上で遭遇することになり、その混乱をどう避けるかの議論の際、戦車隊上層部は、「進路の邪魔になるものは、ひき殺せ！」司馬氏も呆れて日本の軍部は一体、何の為に、敵と戦っているのかと思われた由。

戦争は、絶対にやってはいけません。

令和2年（2020）9月5日

愛媛県 松山市 山村 一郎（84才）